

平成28年11月22日

北海道新聞

# 和牛生産「母選び」もIT化

経済

プラス

渡辺組合長（左）の説明に聞き入る沖縄・黒島の繁殖農家ら



## バブル崩壊契機 軽種馬から転換

日高管内ではバブル経済崩壊後の苦境から、肉牛生産農家に転換した軽種馬農家が多い。道によれば、管内の肉牛生産農家は2000年の260戸から、09年には339戸まで増加。15年も274戸を維持する。このうち、繁殖雌牛（母牛）を飼う農家戸数は262戸に上る。「みついし牛」

日高農業改良普及センター

00年260戸→昨年274戸



町内の繁殖農家から素牛を預かり肥育する町和牛センター

## ブランド定着 道内屈指の拠点

「びらとり和牛」などのブランドの浸透で、肥育農家が注目されがちな日高管内だが、実は十勝、胆振、オホーツクなどと並ぶ道内有数の素牛生産拠点了。近年は軽種馬からの転換期の初期に導入した母牛の高齢化が進み、母牛の更新が課題となっている。

「素牛価格が高へ、蓄えができる今こそ、地域内で優秀な牛を確保する取り組みをさらに進めてほしい」と話している。

質の良い肉牛の生産につなげようと、日高管内の繁殖農家で、母牛の管理に肥育後の子牛のデータなどを反映させる取り組みが広がっている。ポイントはいかに良い子牛を産む母牛を手元に残すか。貿易自由化の流れで国際競争力が求められる中、新冠町と新冠町が町静内地区で行われている経営基盤強化に向けた先進的な取り組みを紹介する。

「素牛」の生産でも道内有数の生産拠点了。その背景には、素牛のデータを集め、母牛の管理に生かすシステムがある。2003年に発足した新冠町静内和牛生産改良組合（渡辺隆組合長）では15年から、道立総合研究機構畜産試験場が開発した牛群管理ソフトを母牛の選別に役立てている。一昨年の全道の研究会でソフトを知った渡辺組合長（59）が、日高農業改良普及センターやJAしすいなどに

## 新ひだか静内 ソフトで管理 最高ランクも 新冠

「遺伝」で分析 新冠町では2017年、町営の和牛センターを開設した。農家から素牛を預かり、専用の飼料など「みついし牛」ブランドの基準で20カ月肥育して出荷し、市場での枝肉としての評価を農家に還元している。

肉牛の品質は枝肉となつてみないと評価が難しい。そこで、センターは枝肉の市場での品質評価を分析。飼育環境などの要素を排除し、素牛の持つ遺伝的な能力を「育種価」をはき出す。農家は、育種価を元に良い素牛を産む母牛を選別できるといっわけだ。

同町では現在、和牛生産組合加入農家34戸のうち、21戸が和牛センターに素牛を預ける。各農家では育種価などから作成した「総合指数」を基に、町や農協から助言を受け、母牛の世代交代の際の選別などに生かしている。

全道の肉牛を取り扱う十勝枝肉市場（帯広市）でも、町和牛センターで肥育した牛の総合指数平均値は55・42と、市場全体の基準値50を上回る。品質の主な指標すべてで最高ランクに評価された牛も出たという。町和牛生産改良組合の青木真一組合長（41）は「途上だが、期待以上。信頼度は高い」とし、JAにいかつぶ畜産課の西将昌調査役（30）も「今後も高いレベルを保ちたい」と意気込んでいる。

### 全25戸が導入

「みついし牛」など全国的な和牛ブランドで知られる日高管内は、肥育牛となる子牛を母牛の選別に役立てている。一昨年の全道の研究会でソフトを知った渡辺組合長（59）が、日高農業改良普及センターやJAしすいなどに

（加藤祐輔）